

## 日本語における「徳」の意味合いとギリシア哲学の役割について

立花幸司(千葉大学)

現在、日本の(西洋)哲学の業界においては、「徳」という言葉は、まずギリシア哲学の重要概念である「アレテー」の訳語として理解されているのではないかと推察する。また、最近では、古代ギリシア由来のこの概念を中核に据えた(あるいはアレンジした)現代の規範倫理理論の一つである徳倫理学(virtue ethics)や、その認識論への展開である徳認識論(virtue epistemology)で頻出する概念——但し、アレテーとしての徳とは幾分異なる意味合いを持つ概念——として、理解されているようにも思われる。さらには、そうした徳倫理学への対抗として近年中国の研究者らが活発に論陣を張っている現代の儒教的な徳倫理学においても、目にすることができる。

しかし、そうした学術研究の訳語としてではなく、日本で普通に使われているという意味で「日本語」としての「徳」は、どのような意味合いをもつのだろうか。本発表の主題は、日本における「徳」という言葉のもつ意味合いの揺らぎを僅かながらでも明らかにすること、そしてそこにギリシア哲学の受容が果たした役割を明確にすること、である。

まず、日本語としての「徳」が辿ってきた歴史を必要な範囲で家訓する。日本において、「徳」という言葉は儒教に由来し、また儒教との結びつきで用いられはじめた。他方で、日本においては、儒教は仏教ほどには、人々の心に根付くことはなかった。儒教の「本格的」な受容は、江戸幕府成立後に朱子学を受容する者たちでなされたことと理解されており、その後、武士階級を中心に、忠孝を軸とする儒教的な価値観が江戸幕府の封建制度を支えたとされている。

明治政府が樹立された際、そうした儒教的な価値観は否定的な評価を受けるようになるが、それに対して反対する動きもあり、結果として、教育勅語(1890年)では儒教的な徳が反映されることとなる。終戦まで、五度にわたって刊行された検定教科書(とりわけ「修身」)では、版によって程度の違いはあるものの、最終的には極めて全体主義的で軍国主義的な徳を唱えるものとなった。

戦後の教育制度では、そうした戦前の徳目主義的な教育への反省から修身は廃止される。その後、1958年に、道德教育は学校教育全体でなされるものと位置づけられたうえで、「道德の時間」が特設される。この特設の際も、戦前の徳目主義的な教育に回帰してしまうことの懸念から反対意見が出されている。その後も、徳の扱いをめぐるのは、2007年の教育基本法および学校教育法の改正に伴う愛国心の明記や、2015年に行われたいわゆる道德の教科化など、おおむね道德教育の位置づけをめぐる動きのなかで、「徳」という言葉を登場として何うことができる。

ついで、日本語としての「徳」が辿ってきた以上の歴史のなかで、西洋ギリシア哲学の受容が果たした役割を考察する。この発表では、主に三つの時期に、それぞれの仕方でも役割を果たしたのではないかと考える。

第一は、古代ギリシアの倫理思想の日本への紹介である。16世紀中頃以降、日本にも西洋文化が紹介されたことはよく知られている。その中では、鉄砲や南蛮の最新の技術だけでなく、古代ギリシアの思想・文化についても、天文学、医学、文学など、さまざまなものが日本に紹介されている(永積 1998、渡邊 2013)。

しかし、私が調べたところでは、古代ギリシアの倫理思想が紹介されるようになったのは、明治開国後である。この頃、西洋思想というかたちで、ソクラテスやプラトン、そしてアリストテレスの倫理思想をまとめた本が多く翻訳(抄訳)出版され、また、多くは翻訳した日本人たちの手による著作も出版されている。そのなかですでにアレテーあるいはそれに対応する欧米諸語の訳語として「徳」が当てられている。

第二は、「道德の時間」特設に際して、設置委員会の長を務めた稲富栄次郎が果たした役割である。稲富は古代ギリシアを専門とする教育哲学者であり、学校全体で取り組む道德教育と、そのなかに位置する「道德の時間」という構図を、ギリシア哲学的アレテー観のもとで構想していた(小笠原 2012, cf. 押谷 2001)。彼の論考は、日本における修身や徳目主義に対して、あらたな徳の考え方を提唱するものであった。

第三は、上記二つの時期と一部重なりつつ、日本の古代ギリシア哲学研究者が翻訳などで果たした役割である。とりわけ、アリストテレスの翻訳に際して、訳者たちが「徳」という訳語の位置づけを変えていったのではないかと考える。

以上を通じて、本発表では、日本における「徳」の意味合いは、歴史を通じて変化しており、その変化のなかでギリシア哲学の受容は一定の役割を果たしていたのではないかと仮説を提示する。

### 参考文献

- 小笠原道雄(2012)「道德教育—何が問題なのか」、小笠原道雄・田代尚弘・堺正之編『道德教育の可能性—徳は教えられるか』東京:福村出版、pp. 13-26。
- 押谷由夫(2001)『「道德の時間」成立過程に関する研究—道德教育の新たな展開』(東洋館出版社)
- 永積洋子編(1998)「18世紀蘭書注文とその流布」(基盤 B、印刷所不明)
- 渡邊雅弘編(2013)「日本西洋古典學文献史:切支丹時代から昭和二十年までの著作文献年表(一)~(四)」(基盤 C、京都:田中プリント)